

《第 472 回 (2020 年 6 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階研修室

『動物会議』 ケストナー/作、高橋 健二/訳 岩波書店

3 カ月間の休会を経て、久しぶりに読書会を開催することができました。今月の課題図書は、本来なら 3 月に実施予定だった『動物会議』です。

時は、第二次世界大戦終戦から 4 年。世界は平和になるどころか、病気の蔓延、食糧難や紛争の発生、それによる難民の増加などで苦しむ人は減らず、悲惨な事態はとどまる所がありません。各国の首相や大臣は 80 回以上もの会議を重ねていますが、成果はまるでなし。この現状に怒りの声を上げたのが動物たちです。サバンナに住む象のオスカルは言います。「戦争だ、革命だ、ストライキだって、いつもひどい目にあうのは、子どもたちなんだ。なのに大人はいつだって、子どもたちの未来のためにやった、なんて言う。ずうずうしいと思わないか?」

そこでオスカルたちは「子どもたちのために!」をスローガンに、地球上のあらゆる動物(虫や魚まで)を集めて、最初で最後の動物会議を行います。戦争や貧困が起きないように国境をなくすことを人間に要求しますが、人間たちはまったく取り合いません。そんな人間に動物たちは、あの手この手で調印を求めています。

ユーモアいっぱいの書きぶりと、人間の愚かさや政治の無力さを痛烈に皮肉った内容。こどもたちに平和な世界で楽しく生きてほしい、そして、こどもも平和について考え続けてほしい、という作者の切実な思いが伝わってくるようです。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想を紹介します。

●ケストナーは好きな作家。人間は何度も会議をするが、何も決まらない。けれど動物たちは一回の会議で決めてしまうところが、すっきりして、爽快だった。作者の、こどもを大事にするという視点が伝わってくる。大人もばかにしないで読んで考えてほしい。

●字がぎっしりで「わあ」と思いながら読んだ。世界が変わっていないという思いで書かれたこの作品だが、出版されて 70 年以上経った今、何か変わったのか? 何も変わっていないんじゃないかな。古い作品だが、考えさせられる。現代で続編が出たら、動物たちもオンライン会議をしているかも。

●タイトルは知っていたが初めて読んだ。動物が人間に不満を言うための会議か? と想像していたが、人間のこどもがかわいそうだ! という主張をするためだったので、驚いた。ユーモアのある会話にセンスを感じて楽しく読めた。これから世の中が良くなっていくのでは、という終わり方でよかった。

●つかってはいけない差別的な表現が登場したのが気になった。後に出版された絵本版では書き換えられている。人間は、人種や肌の色でカテゴライズされているが、動物は「動物」で一括り。人間も、動物のようにあるべきだと思った。大人もこどもも、楽しくわかる本。問題ない形の表現で再訳してほしい。

●第二次世界大戦中に書かれた本だと思っていたので、1949 年に出版されたことを知り驚いた。大戦が終わり、紛争が絶え間ない時代。絵本版では、白黒のイラストがカラーになっていて良い。こどものために、大人ができることを社会で考えていく大切さに改めて気づかされた。

●平和をテーマにした児童書の中では基本的な一冊。動物たちの伝えたいことはシンプルで、やり方も徹底している。それに比べて人間は……。書類に埋もれている人間は滑稽だが、今でも私たちは紙に埋もれながら仕事をしている……。

●70 年前の本だが、現在も状況は変わっていない。絵がかわいくて印象的。「動物ビル」はどこにあるんだろう? 作者が東ドイツ出身ということで、平和への思いが人よりも強かったのではないかと思う。

●人間のこどもたちのために、動物たちが人間の大人を変えようとするなんて、アリ? 動物たち、お人好し過ぎないか? でもそれが素晴らしい。今、世界は良くなるどころか、問題はますます深刻化し、愚かな人間は動物たちも巻き込み破滅への道をひたすら進んでいるように思う。

次回 7月9日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室
□『ピリー・ジョーの大地』カレン・ヘス/作、伊藤 比呂美/訳 理論社